

「おわりに」

考えてみれば、自然界においては、あらゆる生物は、つねに死と直面しつつ生きていくのです。親にかばってもらう期間は、ほんのわずかな期間なのです。あとは、どんな運命も受けいれ、耐えてゆくのです。人間も例外ではなかったのです。天災や人災、病気などによる生物学的な死のほかに、社会的な死、たとえば名誉の失墜、挫折などが、自分の努力と無関係に訪れることもあり、それをも人は受け容れて生きていくものだったのです。自分だけが、極端にそれらから逃がれようとするのは、無理であり、不自然だったのです。

自然の摂理にさからった生き方は、どこかでその仕返しをうけるようです。それが自然による警鐘だったのです。それが、私の場合の神経質症だったのです。

今も嫌疑されることや誤解されることは、こわいことですが、そのために、なすべきことから逃げることはないと思います。また、とらわれにひっかかって、動けなくなってしまうことは、ないでしょう。

思えば、とらわれを感じだしてから三十年余りの長い歳月を要して、たどりついた長い道程でありました。しかし、今振り返ってみて、この歳月がすべて役に立っていることがわかります。なぜなら、つらい思いをいつぱいしたということが無駄でなかったどころか、それがために、いろいろな苦痛を訴える人への思いやりを持たせていただくことができるのです。

高校、大学から就職後も、神経質症に関する対処のしかたのわからない両親に、グチや取越苦労、持越苦労を訴え続けては、ずいぶん心配をかけましたし、高良興生院にお世話になる決意をするころには、特に妻や両親には、大変心配をかけたと思います。けれども、両親は信仰により、結果的には間違った方法であった面もありますが、いつも力づけてくれましたし、私が信仰を棄てることにも寛大であってくれました。妻も、第三子出生直後の不安定な時期に、私の入院を支持し励ましてくれました。妻が大丈夫と言ってくれたおかげで入院もできたのでした。また妻は、森田を身につける以前の、今から考えるとかなり気ままであった私も、少しは大人になった今の私も、そのままに認めてくれている、大変ありがたい存在なのです。

それから、S集談会で、あたたかく、かつ、厳しく、力づけひっぱって下さいましたY理事、S理事、幹事、世話人をはじめとする皆さまがた、その他、森田関係の皆さまに、心より感謝申し上げます。

今も、生きていく上での不安はいろいろあります。毎日、今日はこの山を乗り越えて、今週は、この山を乗り越えて、というような気持ちで生きています。直面する山の一つ一つは、いやなものと感じることは多いですが、あとで振り返るとたいしたことではないのです。それが、主観と客観の差なのだと思います。もし不安の山がない毎日であれば、きつと生きるはり合いの少ない人生だと思えます。作家の豊田穰さんが、あるところに書いておられました、「挫折の谷が深ければ深いほど、次の山へ登るエネルギーは豊かに貯えられるはずだ」と。今日一日、この一日を大切にしつつ、次の山、次の山を、少しでも皆さまのお役に立てるように、そして一生を発見会の仲間とともに、せいっぱい生きてゆきたいと思えます。

そして、森田先生、水谷先生、長谷川洋三先生、高良先生、阿部亨先生、丸山晋先生、岩井寛先生、馬杉保先生をはじめ、多くのお世話になったかたがたのご恩に報いることができるよう努めたいと思います。

(続)